

地球電磁気・地球惑星圏学会

SOCIETY OF GEOMAGNETISM AND EARTH,
PLANETARY AND SPACE SCIENCES (SGEPSS)

<http://www.sgepss.org/sgepss/>

第 219 号 会 報 2014 年 4 月 25 日

目	次
第 27 期臨時運営委員会報告 1	Conductivity Anomaly 研究会 山口 覚 12
第 27 期第 6 回運営委員会報告 2	中間圏・熱圏・電離圏研究会
第 133 回総会のご案内 4	津川卓也, 江尻省, 大山伸一郎, 陣英克,
2014 秋学会特別セッションの募集 4	鈴木臣, Huixin Liu, 細川敬祐 13
学会費納入についてのお知らせ 5	太陽地球惑星系科学シミュレーション分科会
SGEPSS フロンティア賞を受賞して	三好 隆博, 梅田 隆行 14
広岡公夫 6	第 22 回 衛星設計コンテスト
国際学术交流の報告	参加登録開始のお知らせ 15
若手派遣事業の支援を受けて 松村 充 7	助成公募・学会賞・国際交流事業関係年間
小野先生を悼んで 中村正人 8	スケジュール 17
小野高幸先生のご逝去を悼んで 小原隆博 9	SGEPSS カレンダー 17
小野高幸先生のご逝去を悼む 藤井良一 10	賛助会員リスト 18
小野高幸先生のご逝去を悼んで 三好由純 11	
分科会活動報告	

第 27 期臨時運営委員会 報告

日時: 2014 年 1 月 30 日 (木) 10:00 ~ 11:00
場所: TV 会議 (親局 = 京大地磁気センター、子局 = STE 研、ISAS、地震研、九大、東北大、NICT)

出席者 12 名 (総数 18 名、定足数 11 名): 中村正人 (会長)、山崎俊嗣 (副会長)、小田啓邦、尾花由紀、坂野井和代、塩川和夫、藤浩明、長谷川洋、馬場聖至、村田功、村山泰啓、吉川顕正

欠席者 6 名: 大塚雄一、小嶋浩嗣、篠原育、中村卓司、畠山唯達、吉川一朗

1. 国際学术交流事業の審査 (藤)

応募が 1 件あった。議論の結果、追加情報を求めて再審査することとした。

2. 故・小野評議員について (中村会長)

故・小野評議員を名誉会員に推挙すること、また後任を小原隆博会員 (東北大) とすることについて評議員会の同意を得たことが報告された。名誉会員の件はご家族に、評議員の後任については小原会員に確認を取って手続きを進めることとした。

3. 会報 (尾花)

会報の印刷媒体配布中止に伴い電子版のデザインを再考する件につき、数社と相談したものの、現時点では経費節減にも繋がる有望な提案が得られていない。本件は継続検討課題とする。

4. EPS 誌 (小田)

資料に基づき以下の項目について報告があった。

- EPS 誌の活動スケジュール
- 現在までの論文投稿・受理状況
- H25 年度科研費の執行状況と使用見込み

- 5 学会分担金の覚え書き (SGEPSS の分担金が 150 万円になる)
- EPS 誌学会間内規改定案
副議長の新設などについての議長案が示された。副議長の任命手続きなどについては継続検討することとなった。
- 今後の価格改定 (letter に incentive をつける方向)
- JpGU との合流に向けて (継続検討)

5. 共催・協賛関係 (庶務)

下記 1 件の後援・協賛依頼があり、承諾することとした。

- ゴールドシュミット会議 2016
主催：日本地球化学会、Geochemical Society、European Association of Geochemistry
開催期間：2016 年 6 月 26 ～ 7 月 1 日
開催場所：パシフィコ横浜

(馬場 聖至)

第 27 期第 6 回運営委員会 報告

日時： 2014 年 4 月 1 日 (火) 11:00-16:00
場所： 地震研究所 1 号館 3 階 事務会議室 A
出席者 16 名 (総数 18 名、定足数 11 名)：中村正人 (会長)、山崎俊嗣 (副会長) 小田啓邦、大塚雄一、尾花由紀、小嶋浩嗣、坂野井 和代、塩川和夫、篠原 育、長谷川 洋、畠山唯達、馬場聖至、村田 功、藤 浩明、中村卓司、吉川顕正
欠席者 2 名：村山泰啓、吉川一朗

1. 前回議事録の確認 (総務)

- 第 27 期第 4 回および第 5 回運営委員会議事録を確認し、承認した。

2. 協賛・共催関係 (庶務)

・下記のとおり共催二件、協賛三件、後援一件の依頼があり、承諾することとした。

- 共催：衛星設計コンテスト
主催：財団法人日本宇宙フォーラム、日本機械学会、日本航空宇宙学会他
開催期間：2014 年 4 月 - 11 月
開催場所：相模原市立博物館 (2013 年度の最終審査会場) 等
平成 26 年度の実行委員：会長と坂野井委員、企

画委員：中田 (裕) 会員、審査委員：亀田会員。
 共催：第 12 回国際サブストーム会議 (The 12th International Conference on Substorms)
主催：名古屋大学太陽地球環境研究所、JAXA 宇宙科学研究所、情報通信研究機構
開催期間：2014 年 11 月 10 ～ 14 日
開催場所：伊勢志摩ロイヤルホテル (三重県志摩市)
HP：<http://www.stelab.nagoya-u.ac.jp/ICS-12/>

協賛：Plasma Conference2014
主催：日本物理学会、プラズマ・核融合学会、応用物理学会プラズマエレクトロニクス分科会
開催期間：2014 年 11 月 18 日～ 21 日
開催場所：朱鷺メッセ (新潟市)
HP：<http://www.jspf.or.jp/PLASMA2014/>

協賛：第 30 回宇宙技術および科学の国際シンポジウム
主催：第 30 回宇宙技術および科学の国際シンポジウム組織委員会、一般社団法人日本航空宇宙学会

開催期間：2015 年 7 月 4 日～ 7 月 10 日
開催場所：神戸国際会議場 (兵庫県神戸市)
HP：<http://www.ists.or.jp/>

協賛：日本流体力学会年会 2014
主催：日本流体力学会
開催期間：2014 年 9 月 15 日～ 17 日
開催場所：東北大学川内北キャンパス (仙台市)
HP：<http://www.nagare.or.jp/>

後援：地震・自然災害のための測地学国際シンポジウム (GENAH2014)
主催：GENAH2014 実行委員会、国際測地学会 (IAG) 第 3 委員会 (地球回転・地球動力学)
開催期間：2014 年 7 月 22 日～ 26 日
開催場所：ホテル大観荘 (宮城県宮城郡松島町)
HP：<http://genah2014.jpn.org/>

3. 入退会審査 (庶務)

以下 6 名のシニア会員移行を承認した。
小山 孝一郎、佐々木 進、田中高史、中島正志、広岡公夫、福西 浩
 以下 4 名の一般会員と 1 社の賛助会員の退会を承認した。
一般：入交芳久、坂口浩一、樋口知之、浅見智子
賛助：丸文株式会社

4. 会計関係（会計）

□平成 25 年度秋学会会計：LOC から学会運営経費 75 万円全額の返金があった。

□会費滞納者の督促について：経費削減のため、3 年以上の長期滞納者には文書にて、それ以外の滞納者には電子メールにて、督促を行った。

□平成 26 年度年会費請求について：納入方法の違いに合わせて、請求書を郵送する会員（銀行振込）と、電子メールによる請求のみの会員とを分けることとした。

□JpGU2014 におけるプロアクティブ学会事務局の学会ブース滞在期間を、従来の 2 日間から 1.5 日間に減らすこととした。

5. 助成・学会賞関係

□名誉会員推挙および学会特別表彰の候補者推挙の準備状況が報告された。

6. 外部の助成・賞への推薦（賞 TF）

□平成 25 年度の推薦のまとめ：7 つの賞に 8 件を SGEPS より推薦した。その他に他学会、所属機関推薦による SGEPS 会員の推薦がそれぞれ 1 件あった。

7. 秋学会関係（秋学会担当）

□LOC の引継物資の廃棄と整理を行った。

□昨年秋学会で余ったプログラムと CD-ROM を 5-10 部、プロアクティブに送付した。

□2014 年秋学会の進捗状況について：10 月 31 日—11 月 3 日にキッセイ文化ホールで開催予定。

□アウトリーチイベント：総会と平行して実施する方向で検討することとなった。

□会場受付における参加費徴収の負担を減らせないかという希望に対して：

会場受付に運営委員が受付の責任者として常駐する、1 日ごとに会計責任者をおく、などの意見が出された。秋学会の投稿システムや事前参加費支払いシステムの構築とも関連する問題なので、検討を継続し、次回の運営委員会ですらに議論を行う。

□秋学会会計口座について：学会が法人化すれば口座の設置や維持が容易となるが、今年度中の法人化は難しい。今年については LOC に口座開設をお願いすることとなった。

8. アウトリーチ活動について（アウトリーチ）

□平成 25 年度秋学会イベント用の科研費の事後処理が終了した。

9. 男女共同参画関係について（男女共同参画）

□男女共同参画学協会連絡会が 3 月 19 日に開催され、木戸ゆかり会員が出席した。要望書の提出を行い受理されたこと、応用物理学会により（正規加盟から）オブザーバーへの移行の希望が出され、承認されたことなどが報告された。

□秋学会の託児室を宿泊施設の近くに設けることを検討中。

□学会員数の男女比の調査依頼が極地研からあったので、今回はプロアクティブに対応をお願いした。

10. 広報関係（吉川顕正）

□会報への広告掲載について（総務）：次号から電子化するので、ページ数の制限はなくなる。賛助会員へのサービスの一つとして、広告スペースを提供することとした。広告スペースの大きさは年会費の口数に依存させるが、会報担当が詳細を決定し、賛助会員に案内する。広告掲載の依頼があった場合は、賛助会員になれば無料で掲載できることを案内する。

11. 法人化検討 検討状況報告（副会長）

□一般社団法人の方が NPO 法人よりも、なるのは簡単で、毎年の事務作業も少ない、西田基金への寄付など、収益事業に使わないものであれば非課税となる、等が報告された。詳細についての TF としての報告は、次回運営委員会で行う予定。検討すべき項目については、夏の運営委員会にて議論する。

12. JSPS に対する科研費代表者取り扱いに関する声明の検討（会長）

□小野会員の逝去に伴う大型科研費の終了に対して、学会から声明を出すことが検討されたが、逝去をきっかけとした特定の科研費の事案に対して反応することは問題であるのではないかという意見が出された。

□JSPS の地物班の班会議などで、今回の問題を議題とすることになっているので、しばらくは JSPS からの返答を待つこととなった。

□科研費代表者が死亡した場合だけではなく、

女性が代表者となった場合など、出産・育児や病気の場合にも対応できるような制度作りが必要であるとの意見が出された。

13. EPS 関係報告 (EPS 担当)

□編集事務局の場所の移動：これまでは学会センタービル 5F にあったが、小川編集長の近く(大岡山)の部屋を契約し、事務局員には4月1日からEPS誌専任となっていた。

□論文投稿・受理状況：3/15の時点で、Springer Openへの投稿論文数は165編。

□平成25年度科研費およびEPS誌運営委員会基金の執行状況が資料に基づいて報告された。また平成26年度科研費と基金予算暫定案が資料に基づいて説明された。

□今年のEGUブース協力者へ謝金を支払うこと(またはEPS誌のAPCの無料化)、およびTeX作成者への謝金を支払うことを承認した。また、金額はそれぞれ2万円の案が提示され、承認された。EPS誌運営委員会MLで最終確認を行う。

□EPS誌学会間内規改定案(会計についての追加条項)が提示され、特に異議は出なかった。5学会の意見を集約して近日中にEPS運営委員会MLで案を確定させる。

また、3/18のEPS誌運営委員会で出たEPS賞の盾を作成する案が紹介されたが、特に反対意見はなかった。(長谷川 洋)

2014年秋学会のお知らせ

2014年秋学会(第136回総会・講演会)は、10月31日(金)～11月3日(火・祝)に長野県松本市のキッセイ文化ホール(長野県松本文化会館)で開催されます。アブストラクト投稿は6月下旬～7月下旬の期間になる予定です。皆様のご参加・ご講演をお待ち申し上げます。

特別セッションの募集

2014年秋学会(10月31日～11月3日)の講演会開催に向けまして、「特別セッション」のご提案を広く会員の皆様から募集致します。「特別セッション」の詳細は下記の通りです。次の内容を添えてご応募下さい。

1. コンビナー：お名前，ご所属，ご連絡先
2. セッションタイトル(日本語および英語)
3. セッション内容説明
4. 特別セッションとして行う意義
5. セッションの規模(参加見込人数)

応募先：fm@sgepss.org

締切：2014年5月16日(金)17:00

ご応募頂いた提案は、運営委員会で検討した後、結果を会報やホームページ等で周知させて頂きます。多数のご応募をお待ちしております。尚、ご質問等は運営委員会・秋学会担当委員までご連絡下さい。

(秋学会担当運営委員：畠山唯達，藤浩明，吉川顕正)

記

○「特別セッション」について

学会及び秋の講演会の活性化を図るために、秋学会では「特別セッション」を設けています。「特別セッション」は、次のような内容を議論する場として位置づけられています。

・レギュラーセッションとは別枠で議論する話題性のある内容(時機にあった話題、重要テーマなど)

・当学会内、また他学会も含めたような、分野横断的な内容

特別セッションでは、講演数の制限を緩め、レギュラーセッションと重複した講演申込も可能となっています。これまで開催された特別セッ

第135回総会開催のご案内

第135回総会を秋の講演会期間中の以下の日時に開催します。

開催日時：4月30日(水)13:00～14:00

開催場所：パシフィコ横浜会議センター
5階503会場(

日本地球惑星科学連合2014年大会会場)

学会賞授与などの重要な議事がありますので、会員の方はぜひご出席ください。やむを得ず欠席される場合には、事前に委任状を会長宛てに郵送いただくか、運営委員にお渡しください。

また、電子メールでの委任状受領ができます。

詳細はメーリングリストにてお知らせします。

(篠原 育)

ションは以下の通りです。

- ・ 2004 年秋：「宇宙天気」
- ・ 2005 年秋：「宇宙進出と STP 科学の接点」, 「SGEPSS における小型衛星の可能性」
- ・ 2006 年秋：「地上－衛星観測・データ解析・モデリングの統合型ジオスペース研究に向けて」, 「地球惑星磁気圏探査：将来計画～これからは黄金の 20 年とするために～」
- ・ 2007 年秋：「STE 研究における地上ネットワーク観測の現状と将来展望」, 「SGEPSS 創立 60 周年記念特別セッション：地球電磁気学の歩み」
- ・ 2008 年秋：「南極昭和基地大型大気レーダーによる超高層大気研究の新展開」, 「地震学と地球電磁気学の境界領域研究」
- ・ 2009 年秋：「月周回衛星『かぐや』観測による STP 研究の新展開」
- ・ 2010 年秋：「SGEPSS における最新の月科学：『かぐや』から次の時代へ」
- ・ 2011 年秋：「電離圏変動と地震の関係」
- ・ 2012 年秋：「地殻・大気・電離圏結合」, 「地球電磁気・地球惑星圏科学の将来構想」
- ・ 2013 年秋：国際宇宙ステーションからの地球大気・プラズマ観測による新展開

学会費納入についてのお知らせ

2014 年度学会費納入の案内が届いていることかと思えます。経費削減のため、今年度から「銀行振込」の会員のみ書面で、それ以外の会員には電子メールで案内をさせていただきました。所定の方法によってお支払い頂きますよう、お願い申し上げます（納入期限：7 月 31 日）。学会の様々な活動を支える財政基盤は会員の皆様に納入して頂く会費にあり、未払いがありますと健全な学会運営に重大な支障をきたします。督促作業には経費とともに人的コストが相当かかりますので、皆様のご協力をお願い申し上げます。

なお、学生会員については秋学会への参加費として会費は領収されますので、今回の学会費納入案内は行いません（正会員へ移行になる会員には案内をお送りしました）。今年度の秋学会に不参加等の理由で別途会費納入を希望する学生会員は事務局までご連絡をお願いいたします。

当学会の会費納入は以下の 5 つの方法よりお選

びいただけます。

- (1) 銀行振込（校費払いも可能）
- (2) 銀行口座自動引き落とし（7 月下旬に引き落とし予定）
- (3) クレジットカード払い
- (4) コンビニエンスストアでの支払い
- (5) JPGU 会場 SGEPSS デスクでの支払い（現金のみの取り扱い）

学会費の支払い方法変更については随時受け付けておりますが、基本的には翌年の支払い時から有効となります。もし今年度の学会費支払い方法を変更されたい場合は至急事務局 (sgeps@pac.ne.jp) にご連絡ください。

銀行口座自動引き落とし、およびクレジットカード払いについては、学会が手数料を負担します。毎年の支払いの手間を省くには、銀行口座自動引き落としが便利でお勧めです。ご希望の方は書面による手続きが必要となりますので事務局へお問合せください。

平成 26 年度 JPGU 会場の学会デスクにおける会費支払いは、4 月 29 日（火）の午後、及び 30 日（水）の全日に受け付けています。

（会計担当運営委員：小嶋浩嗣・大塚雄一）

SGEPSS

フロンティア賞を受賞して 富山大学 名誉教授 広岡公夫

この度、第3号SGEPSSフロンティア賞をいただきました。受賞対象は「日本における考古地磁気学の永年変化曲線の確立と考古学への貢献」で、博士論文の「過去2000年の西南日本の考古地磁気永年変化」(1971)がそのベースになっています。日本各地の考古遺跡に残されている窯跡や炉跡などの焼土遺構から試料を得て、その残留磁化方位から過去の地球磁場方向の変遷を求めたものです。

私事になりますが、大学院博士課程の1年次の1963年10月に大阪大学の助手の職を得ました。時あたかも東京オリンピックを翌年にひかえ、新幹線や高速道路の建設が日本中で始まったところでした。ニュータウンと呼ばれる住宅団地の土地造成も大都市郊外で盛んに行われるようになりました。文化財保護法で、造成途中で遺跡が見つければ事業者が考古学的発掘調査を行う義務が課せられているため、60年代後半～80年代末の高度経済成長期からバブルがはじけるまでに、日本各地で膨大な数の遺跡が発掘されました。

このような状況下で、研究者の一員に加えてもらった私は、まずは、当時まだ多くのデータが出されていない考古地磁気を研究テーマにしようと思い立ちました。しかし、そのためには、焼土の測定試料を遺跡現場で採取しなければなりません。発掘調査が完了した直後で、削られたり埋めもどされたりする前の絶妙のタイミングでサンプリングを行わなければなりません。調査をしている考古学者の協力なしにはできない相談です。

はじめのうちは、京都大と名古屋大の考古学教室の協力をいただいて、少しずつ始めました。案内してもらって発掘現場に着くと、発掘を実際に担当しているのは府県や市町村の教育委員会の調査担当の職員の人達です。遺跡現場で紹介してもらって、だんだんと発掘担当者の人達との付き合いが広がっていきました。各地の教委の懇意になった調査員から電話連絡をもらうようになり、考古地磁気試料数は順調に増加していきました。

大阪府教委の人達にも大変お世話になりました。大阪府内でも大規模な発掘調査地が増え、府教委の調査員達は多忙を極めていました。調査員の各自が担当する現場の調査が終わると、すぐ、次の遺跡の調査に取りかかるという状況でした。そして発掘が完了するたびに、電話連絡があり、弥生や古墳時代の住居址や焼土坑、須恵器窯跡等々、多くの遺跡から試料を採ることができました。特に、日本の須恵器生産の原点であり、最大の生産拠点であった堺市東部から富田林に至る地域に分布する陶邑(すえむら)古窯跡群の考古地磁気測定結果は、西南日本の永年変化の主要データをなしています。

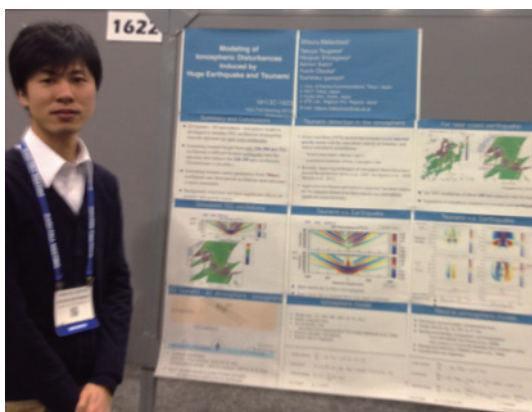
最初の頃に名古屋大学の協力を得た縁で、東海地方にも強い繋がりができ、瀬戸や美濃焼など中世陶器窯のデータも多く得られました。また、私が福井大学、次いで、富山大学に転任したことで、北陸地方のデータも集めることができました。

技術的なことでは、多様な形態をしている焼土遺構から如何に正確な定方位のサンプルを、しかも、短時間に採取するかということに腐心し、石膏で固め、上面を平面にして方位測定の精度を上げる採取法にいきつきました。これによって、高精度の試料をより多く能率的に採取できるようになりました。試料採集には道具も多いので、車で移動し、日本中を走り回りました。こうして、この世から消え去るはずだった「地磁気の化石」の試料を考古地磁気研究に生かすことができました。

上記のような考古学者とのネットワーク、サンプリング・システムの構築と、身軽なフットワークがフロンティア賞に導いてくれたのだと思います。有り難うございました。



若手派遣事業の支援を受けて 電気通信大学 松村 充



国際学術交流若手派遣事業の支援を頂き、2013年12月9-13日に開催されたAGU Fall Meetingで二件のポスター発表を行いました。

一つ目の発表を行ったセッションは、地震・津波・隕石落下のような自然災害がひきおこす電離圏擾乱の研究を募ったものです。電離圏擾乱は、GPSをはじめとした衛星航法システムによって、時間的・空間的に高い分解能で、リアルタイムに観測できるようになりました。それにともなって、電離圏擾乱の観測は、自然災害の規模の推定や早期予報のためのツールとして期待されつつあります。応用にとって重要なのは、電離圏擾乱とその擾乱源の対応関係を定量的に明らかにすることです。このセッションでは、応用を意識して、電離圏擾乱の振幅と地震のマグニチュード、電離圏擾乱の広さと海面の隆起領域などの対応関係をしらべた研究が集まりました。

私は、学生の頃から、2011年の東北沖地震時の電離圏擾乱の数値シミュレーションをおこなってきました。電離圏擾乱と擾乱源の対応関係を定量化するために不可欠な数値シミュレーションが評価されて、私はこのセッションに招待をいただきました。発表したシミュレーション結果は以下のとおりです。東北沖地震のときに日本で観測された電離圏擾乱は、断層運動による初めの急激な海底/海面変動と、それにともなって伝播する津波が、それぞれ大気波動を介して引き起こしたものです。初めの急激な海面変動は、音波および大気重力波を励起し、津波は大気重力波のみを励起します。大気重力波

は、初めの海面変動と津波のそれぞれによって励起されるので、大気重力波に起因する電離圏擾乱から、津波のみの振幅を推定するのは困難です。一方、音波は、初めの海面変動のみによって励起されるので、音波に起因する電離圏擾乱から、初めの海面変動の振幅を推定することが可能です。初めの海面変動の振幅がわかれば、津波の振幅も推定できます。以上が発表内容です。

防災への応用を意識したセッションであったせいか、ポスターを見にくる方は、電離圏よりは、地震や津波の防災に興味がある方が多かったようです。外国の研究者にとっても、日本の大津波で多くの犠牲者が出たことはかなりショッキングだったようで、津波の早期予測に対する関心の高さがうかがえました。現在のところ、地震や津波の規模の推定は、速報段階では、短周期地震波の観測に基づいておこなわれています。しかし、この手法では、地震の規模が大きい場合、規模が過小評価されてしまいます。そのため、多様な手法によって地震の規模を推定することが重要です。多様な手法のひとつとして、電離圏擾乱の観測に興味を持った方もおられ、応用に向けて頑張ってもらいたいと激励してくださいました。セッションの規模の関係で口頭発表の枠がなくなってしまったのが残念でしたが、このような意見を一人一人からいただけたのはかえってよかったと思っています。

二つ目の発表では、現在主としておこなっている研究を紹介しました。地震とは打って変わって、太陽風に起因する極域の電離圏対流が熱圏におよぼす影響をシミュレートしたものです。カस्प域では、低軌道衛星が飛翔する高度400km付近で、中性大気の質量密度が周囲に比べて平均的に高いことが知られています。この現象は、中性大気が、高速で流れるイオンとの衝突によって加熱され、質量が鉛直方向に輸送されて起こると考えられています。しかし、私たちは、加熱だけでは質量密度の増大領域をカस्प域に限定できないことを示し、イオンから中性大気への運動量輸送が、質量密度の分布にとって重要なことを明らかにしました。

こちらの発表では、同じ現象についてシミュレーションを行っている研究者たちに、新しいメカニズムを提案することができました。訪れ

た誰もから、その発想はなかったとのコメントをいただき、手応えを感じています。特に、同世代の優れた研究者とじっくり議論できたことは、大きな刺激になりました。

最後に、AGUへの参加を支援して下さった本学会の若手派遣事業、ならびに、私をAGUに招待して下さったコンビナーの皆様には、深く感謝しております。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

小野高幸評議員会ご逝去 地球電磁気・地球惑星圏学会長 中村正人

地球電磁気・地球惑星圏学会 小野高幸評議員におかれましては昨年12月21日早朝、この世を去られました。ここに深い哀悼の意を表するものです。

小野評議員は、福岡県のご出身で、昭和52年3月に東北大学大学院理学研究科博士課程前期を修了、昭和55年3月に同博士課程後期を退学、同年4月に国立極地研究所・助手に採用された後、昭和56年3月理学博士（東北大学）の学位を取得されました。その後、第25次および第31次の南極越冬観測に参加された他、昭和62年には交換科学者派遣によりチリ南極観測隊への同行、昭和63年には米国ジョンス・ホプキンス大学に文部省在外研究員として滞在されました。平成3年に国立極地研究所・助教教授に昇任され、平成6年に東北大学理学部に助教教授として着任され、平成12年4月に教授に昇任されました。

学会関連では日本学術会議の電離圏専門委員会、STEP専門委員会、電波科学研究連絡委員会H分科会委員、地球電磁気・地球惑星圏学会の運営委員および評議員を歴任されました。また、宇宙科学研究所の客員教授および理学委員会委員、国立極地研究所の専門委員、名古屋大学太陽地球環境研究所、京都大学生存圏研究所など全国共同利用機関の運営委員を務められました。

小野評議員は、学生時代より宇宙への強い関心をお持ちになり、大学院在学中、極地研在職中、東北大在職中に数多くの業績を残され、本学会

の発展に多大な貢献をされました。これらのご業績は以下の様に挙げる事が出来ます。

1 電離圏超高層大気・磁気圏の飛翔体観測研究（東北大在学中）

観測ロケット（K-9M-53、56、61、63、71号機、L-3H-9号機等）および科学衛星「じきけん」にプラズマ波動計測班員として参加し、サウンダーによる地球電離圏・磁気圏でのプラズマ波動励起実験の成功に貢献されました。これらの成果・実績は、その後の科学衛星「おおぞら」「あけぼの」でのサウンダー観測の継続・発展へとつながりました。

2 極域地上観測研究（国立極地研在職時）

ノルウェーやスウェーデンでの大気球実験を始めとして、アイスランドにおける南極・昭和基地との共役点オーロラ観測、ロケット実験など、北極極域での観測研究を進められました。さらにオーロラの2次元多波長撮像システムを開発し、南極昭和基地での観測運用に初めて成功されました。また、観測データの解析・科学衛星データとの比較によって、低緯度のディフューズオーロラの多くがプロトンによるものであること、オーロラ降下電子のエネルギースペクトルの変化に呼応してオーロラ光のスペクトル強度比が変化する事を実証しました。これらの業績に対して、昭和63年に地球電磁気・地球惑星圏学会田中館賞が、平成元年には山崎賞が授与されました。

3 月・惑星電離圏・磁気圏の飛翔体観測研究（東北大在職時）

火星探査機「のぞみ」搭載のプラズマ波動観測器の責任者として、火星電離圏の世界初のサウンダー観測を目指されました。残念ながら、探査機の軌道投入失敗により観測は実現しませんでした。技術的実績は、月探査機「かぐや」で活かされることとなりました。平成19年に打ち上げられた月探査機「かぐや」では、月レーダーサウンダーのプロジェクトリーダーを努められ、世界初の月全球での地下探査を成功に導きました。月の熱進化の解明に貢献する貴重な観測データが得られています。

近年は地球の内部磁気圏探査衛星ERGを中核とした衛星・地上観測およびシミュレーションからなる研究計画「ERGミッション」を提唱され、平成20年に脳出血によりお身体が不自由

になられたにもかかわらずその実現に奔走されました。「ERG ミッション」が平成24年に宇宙航空研究開発機構のプロジェクトとして採択され、平成27年度の打上げを目指して開発が進み始めた矢先に小野評議員は旅立たれてしまいました。

我々地球電磁気・地球惑星圏学会員一同は小野評議員の残された足跡を辿るたびに、その偉大さに心打たれます。悲しみは尽きることがありません。

小野高幸先生のご逝去を悼んで 東北大学 小原隆博

小野先生は昨年12月21日未明、持病の悪化により、入院先の病院でご家族に看取られながら、お亡くなりになりました。63才のご年齢でしたが、誰もが病院からの復帰を信じていた矢先のご逝去でした。東北大学理学研究科 太陽惑星空間領域一同、謹んで、小野先生のご冥福をお祈り申し上げますとともに、残されましたご家族の皆様が、再びお元気になられますことを、強く念じている次第でございます。

小野先生は、最近のご著書「太陽地球圏」にて、太陽・惑星間空間での物理過程について、入門者に分かりやすく、尚且つ、専門に進んでいる大学院生の勉学に資する事を念頭に、これまでの研究と教育のご経験ご実績を、その著書のなかで余すことなく展開をされました。学ぶ事の大切さと面白さが随所にちりばめられている先生の著書を手にとって、あらためて小野先生との日々が我々、東北大学の教員の一人一人に甦って参ります。

小野先生のご研究の視野は、太陽に始まりオーロラや地球電離圏・磁気圏の諸現象から、月惑星での現象まで広く亘っております。そして、実験と観測に重きを置きつつ、理論的な検証も常に実行されて、その研究手法は、一滴の水も漏らさぬ周到さに貫徹されてます。

ご研究のご紹介は、既になされておりますが、先生の最も得意とする科学衛星・探査機による観測研究について、鮮明な思い出が、私などにはありますので、少し述べさせて頂きたいと思っております。小野先生は、東北大学理学部 大家研究室に大学院生として在学中から、東大宇宙研(後

に文部省宇宙科学研究所)にて、ロケット実験と科学衛星計画に参加され、プラズマ波動を用いた能動観測を始められました。成果は、科学衛星じきけんからはじまり、おおぞら、あけぼのと引き継がれ、ついには地球軌道から飛び出し、月探査機かぐやにて月表面のレーダ探査を実現されました。私は、科学衛星おおぞらで小野先生から薫陶をいただき、お手本にすべき先輩と、強く思った次第です。

小野先生は、大家先生の後を継いで、2000年から太陽惑星空間講座・宇宙地球電磁気分野の教授に就任され、惑星探査機・月探査機による惑星プラズマ環境の研究を先導されました。幾多の優秀な博士が輩出し、現在、各方面で活躍されています。弟子の皆様は、今後とも益々精進され、小野先生の夢を引き継ぎ、実現して下さると確信しています。

夢の代表は、放射線帯観測衛星のERGです。来年度の打ち上げをめざし、JAXA宇宙科学研究所 相模原キャンパスで製作が進んでいます。私自信、2000年当時、磁気圏放射線予報に取り組んでいましたが、なかなか目途が付かずにおりました。小野先生が、放射線帯の調査研究を進めている私の様子を見て、科学的に研究する事の大切さを話してくださり、その年の宇宙科学研究所の磁気圏ワーキンググループ会議で、ERG衛星の原案となる提案を連名で行ってくれました。ただ、そこでは、SCOPE衛星が優勢であり、小野先生の提案は賛成2名という状況でした。

ここまでに述べたかった事は、小野先生の姿勢で、広い視野を持つことを実行してこられた先輩が私たちのすぐ傍におられたという事実です。小野先生は、63才にて他界されましたが、今も、私達の心の中に、しっかりと生きておられ、その事が、今後の私達の歩みを助けてくれます。唯々感謝するばかりです。

東北大学理学研究科 太陽惑星空間領域は、大切な大将を失いました。残された私達は、小野先生の示して下さった、常に原点(基礎)に戻り、もう一方で新機軸を開拓する気概を持って、この難局を乗り切っていく所存です。そして、これからの東北大学の歩みの中で、その節々の時節に、大家先生の東北大赴任を起点とする宇宙探求の潮流の状況を、俯瞰的な視点から常に確認し、新たな提案をすることにより、着実に、

日本と世界の学界に、そして若き学生の皆さんの教育に力を出していくつもりであります。小野先生のこれまでのご指導に深く感謝する一方、小野先生に先立たれた悲しみは癒えずにあります。

小野高幸先生のご逝去を悼む 名古屋大学 藤井良一

昨年12月21日に小野高幸先生ご逝去の報に接した時の驚きと深い悲しみは言葉では表すことはできず今でも癒されることはありません。小野先生が再入院されているとお聞きし、年明けにお見舞いしようと計画していましたが、間に合わなかったことが悔やまれます。

小野先生とはSGEPSSに於ける宇宙科学研究の仲間としてだけでなく、本音で相談し合える信頼できる友人として長年お付き合いをさせて頂いてきました。お互い同い年で、極地研究所の同じ研究室で30代始めから12年間一緒に過ごしました。当時、研究室では、昼間は共同利用等の仕事で忙しく、研究は夕食を食べてからが本番という毎日でした。小野先生とも年がら年中一緒にいて、研究のことだけでなく、南極観測の将来等色々なことを熱く語り合ったという記憶があります。小野先生は批判すべきことはしっかりと批判しましたが、同時に建設的な提案で指導してくれる教育的な研究者でもありました。一方、小野先生は固いイメージが有りますが、意外とお茶目でユーモアに富んでいる人でもありました。

小野先生と言えば、大家研究室の大学院時代から終始一貫人工衛星の専門家というイメージがありますが、極地での地上観測を主とする極地研究所では、CCDカメラやフォトメータを用いたオーロラ分光観測を発案し、オーロラ降下粒子のエネルギー分布の導出等で新たな方法論の開発と知見により重要な学術的貢献をされました。小野先生は2回(25次と31次隊)南極昭和基地で越冬隊員として超高層大気観測に従事されました。1991年の1月に昭和基地で、越冬明けの小野先生達31次隊と新たに基地に到着した私達32次隊が共同で、世界で初めてのゼロプレッシャー気球を用いた南極大陸完全周回に

挑み成功しました。真っ青な空の下、小野先生と二人で実験を指揮したことは懐かしくも良い思い出です。その後、私は1992年に名古屋大学に移動し、小野先生も1994年に母校の東北大学に移られましたが、それ以降も小野先生にはいつも助けられ、様々な薫陶を受けてきました。

小野先生は傑出したハードウェアの技術力を基に、地上観測や「あけぼの」衛星から「かぐや」にいたるまで、先端的な観測研究で主導的な役割を果たされ、中村会長も記されているように、太陽地球系科学、とりわけ磁気圏物理・超高層大気科学で大きな業績を残されました。小野先生は2008年フランス出張中に倒れられて以来、体と言葉が少し不自由になりましたが、頭脳はそれまでと変わらず明晰で、安静にして体力の回復をしてほしいと願う我々の思いをよそに、研究や教育に全力で当たられ大きな指導力を発揮されました。また、宇宙科学研究所の理学委員会や様々な大学の運営協議会等の重要な委員会に於いて、将来の方向性を決める等の重要な局面で指導的な役割を果たされました。九州男児の小野先生は、一本気で、上に媚びず下におごらず、どのような相手にも言うべきことはしっかりと主張されました。その論じるところは、常に太陽地球系科学全体からの観点で見識に富み建設的で、律儀で実直な人柄と相まって多くの人から信頼と尊敬を得ていたことは皆様ご承知の通りです。宇宙科学にとり、かけがえの無い指導者を失いただ呆然とするばかりです。

小野先生の最後のお仕事になったジオスペース探査衛星(ERG)計画では、ご自身の寿命を覚悟したかの如く全力で計画の立案や予算化に尽力されました。実際度々電話を頂き、何とかERG計画を成功させたいと涙ながらに話されていたのを覚えています。このように命と引き換えに進めてきたとも言えるERG計画の実現を見ることができなかったことは、大変無念であったと思います。しかし、私は小野先生が育て上げてきた優秀なお弟子さんや仲間達が、小野先生の執念と遺志を継いで、必ずやERG計画を成功させ、小野研究室の精神と伝統を後世に伝えて行かれると確信しています。

小野先生に感謝と共にその一生に敬意を表し、心からご冥福をお祈り申し上げます。

小野高幸先生のご逝去を悼んで 名古屋大学太陽地球環境研究所 三好由純

昨年12月21日に、小野高幸先生がお亡くなりになられ、4か月がたとうとしています。まだ信じられない思いでいます。先生がPIをつとめられているジオスペース探査ERGプロジェクトが、衛星の打ち上げを目前にしてその製造過程が佳境を迎えつつある中、各種の会議で、そこにいるはずの小野先生の姿が見えない事実を受け止められないでいます。ここに謹んでご冥福をお祈りするとともに、ご家族がお元氣になられますことを切に願っております。

私にとって、小野先生は大学で教えを受けた恩師の一人であり、私が大学に勤務するようになってからも、折々に研究者や教員としてのありかたについての心構えを教えていただきました。大学院生の頃に、先生のプラズマ物理学の授業を受講しておりましたが、作りこまれた講義資料にもとづいて、一つ一つの式の導出を丁寧に行われている様子を思い出します。小野先生は、また衛星観測と地上観測のエキスパートであり、私が学生のころは、ちょうど「のぞみ」衛星の打ち上げの準備に奔走されていました。「のぞみ」そして「かぐや」衛星の開発の様子をうかがうことがありましたが、やがて取得されるデータへの期待を情熱的に話される様子が目に浮かびます。常々、先生から、自然現象のおもしろさと複雑さ、そして観測によって実証することの重要性を伺い、同時にすべてにおいて妥協せず、やりとげることの大切さなど多くの薫陶を受けました。

先生は、2012年に「太陽地球圏」(共立出版)を出版され、私もその執筆をお手伝いさせていただきました。この本の執筆が始まった後、小野先生は脳出血に倒れられ、長期の入院・リハビリ生活を送られることになりました。ご退院後、執筆の打ち合わせのために、東北大学の教授室にお伺いすると、ご不自由なお体にも関わらず、パソコンに向かっておられる姿を拝見し、執筆にかける先生の意気込みを目の当たりにしました。また、その後の東日本大震災において、東北大学は大きな被害を受け、本の執筆も中断することになりました。震災で先生のご自宅も

住むことができなくなり、避難先での生活の中、先生は粘り強く本の完成に向けた準備を進められました。印刷の直前まで、数式の検算を徹底して繰り返しておられた様子を、いまでも思い出します。ここでも、先生の妥協を排し、やりとげるといふ姿勢を学びました。ご葬儀のあとご家族から、「太陽地球圏」の出版を本当に喜んでおられたとのお話を伺い、先生が情熱をかけて執筆された本に微力ながらもご協力させていただいたことに感謝しております。

小野先生は、ジオスペース探査ERG計画の立ち上げとその実現に向けて、文字通り奔走されていました。先生は、自らの「あけぼの」衛星等のデータ解析や当時のCRRES等の結果をふまえて、内部磁気圏探査の重要性とその意義を訴えられ、また、内部磁気圏分科会の発起人の一人として、内部磁気圏研究の推進にもあたられました。10数年前に、ERG衛星計画の検討が始まったころ、この計画が実現にいたるパスは必ずしも自明ではない部分がありましたが、先生はあらゆる可能性を探りつづけ、強いリーダーシップでプロジェクトのメンバーを励まし、ついに計画実現に導いてこられました。

2008年にERG衛星計画が、宇宙航空研究開発機構・宇宙科学研究所の小型科学衛星2号機として提案され、2012年にプロジェクト化されました。先生は、ご不自由なお体をおして、すべての会合に参加されていました。設計会議での小野先生の鋭い指摘とアドバイスは、研究者だけでなく、プロジェクトに関わるJAXAの若手職員も感銘を受けたと聞いています。先生は、「じきけん」衛星から「かぐや」衛星にいたる自らの豊富な衛星開発経験にもとづいて、常に的確な指示をだされていました。また、病院での闘病中「(ERG衛星が打ちあがるまでの)あと2年間、何としてもがんばりたい」とお話されていたことを、ご家族から伺いました。小野先生が文字通り命をかけたERG衛星が、長い準備を経ていよいよフライトモデルの製造に入ろうという矢先の急逝、そのご無念を思うと本当に言葉ありません。

小野先生が去られた悲しみは癒えず、その存在の大きさに改めて愕然とさせられています。小野先生がPIとしてERGプロジェクトの成功に向けられた情熱は、これからも生きていき

ます。小野先生のご意思を継ぎ、ERG 衛星の打ち上げを成功させ、たくさんの発見をご報告できるよう、わたくしたちプロジェクトメンバー一同、全力を尽くしていきたいと思ひます。

小野先生、ありがとうございました。そして、どうぞ ERG を見守っててください。

「Conductivity Anomaly 研究会」 分科会 平成 25 年度活動報告 山口 覚

1. 平成 25 年度 Conductivity Anomaly 研究会の開催

平成 25 年度の Conductivity Anomaly 研究会は、平成 26 年 1 月 7 日（火）～8 日（水）に、東京大学地震研究所 2 号館・第一会議室（ポスター発表会場：地震研究所 1 号館・2 階ラウンジ）において開催された。今回の研究会は、「学生・若手セッション」、「JEMINI 計画セッション」、「通常セッション」の 3 つのセッションから構成され、発表総数は 2 日間で 35 件（口頭発表：30 件、ポスター発表：5 件）であった。参加者数 60 名（2 日間で延べ 100 余名）、うち参加学生は 16 名であった。これまでの CA 研究会では特定のテーマを設けてそれらの中心に開催してきたが、今回は「学生・若手セッション」を設けるなどの通例の学会とも、趣旨を変えた新しい試みを行った。結果的に参加学生数の割合が従来よりも増加したことに加え、「学生・若手セッション」では比較的長く設けた質疑応答の時間（8 分間）でも尽きることはない議論が湧いた。「JEMINI 計画セッション」では、日本列島下の広域比抵抗構造の探査を目的とする巨大プロジェクト「JEMINI 計画」のキックオフという意味合いを濃くした積極的な意見交換の場となった。なお、この後の CA 打合せ会において、本計画は CA 分科会を中心に推進することが確認された。CA 研究会は最後の「通常セッション」も含め、盛会のうちに終了した。

CA 研究会と同日（1 月 7 日）の午前に、宙空系および固体系の研究者の有志によって、両分野の融合を図る小集会被開催された。これは 2013 年度の JpGU において GIC のセッションが

設けられた事を契機として、両分野の研究の現状および共同する事によって大きく発展することが期待される問題について意見交換を行った。



Conductivity Anomaly 研究打合せ会

平成 25 年度は、以下のように 3 回の研究打合せ会を実施した。

- 第 1 回 2013 年 5 月 22 日（水） 幕張メッセ 国際会議場 202 室
- 第 2 回 2013 年 11 月 3 日（日） 高知大学 総合研究棟 会議室 3
- 第 3 回 2014 年 1 月 8 日（水） 東京大学地震研究所 第二会議室

主な議題は、

- ・ CA 分科会幹事および幹事補佐の交代。それぞれ、幹事は大志万直人（京大防）から山口覚（大阪市大）に、幹事補佐は吉村令慧（京大防）から小河勉（東大震研）への交代が承認された。（第 1 回）
 - ・ 平成 25 年度、平成 26 年度の CA 研究会について。
 - ・ 直流送電計画についての情報交換と対応。
 - ・ 地震・火山噴火予知研究計画関連の情報交換。
 - ・ 今後の観測計画について。JEMINI 計画を CA 分科会を中心にして推進することが承認された。今後、CA 分科会幹事を chair としたワーキンググループを発足させ、具体的な計画立案を開始する。（第 3 回）
 - ・ 今後の学会・研究集会についての情報交換。特に、2014 年に開催される国際学会 AOGS2014（札幌）、Induction Workshop（ドイツ・ワイマール）等の紹介・参加投稿の呼びかけがなされた。などであった。
- 次回 CA 研究打合せ会は、JpGU2014 年大会（於：パシフィコ横浜）時を予定している。

中間圏・熱圏・電離圏研究会

(略称：MTI 研究会)

平成 25 年度活動報告

津川卓也・江尻省・大山伸一郎・

陣英克・鈴木臣・Huixin Liu・

細川敬祐

当分科会は、超高層物理学、地球電磁気学、気象学、電波工学や大気化学など様々なバックグラウンドを持つ研究者が相互に交流し、協力し合う場を作り、より効率的・効果的な研究活動に繋げることを目的として活動している。平成 25 年度には、連合大会及び SGEPS 秋学会開催期間中に会合を持ち、国内外において現在進行中のプロジェクト、研究計画などについて情報交換を行った。また、平成 25 年 9 月 17-18 日には、分科会参加者が中心となり、同分野の研究集会を開催した。

第 24 回 MTI 研究会集会

日時：平成 25 年 5 月 21 日（火） 13:30-14:00

場所：幕張メッセ国際会議場 304 室

話題提供：

1. 塩川和夫（名大 STE 研） アジア・アフリカ研究拠点形成事業について
2. 中村卓司（極地研）北極環境研究の長期構想 WS (4/26, 27) 報告
3. 北内英章（NICT） JARE53 ~ JARE54 南極観測船「しらせ」船上、標準電波強度計測—初期結果紹介
4. 西谷望（名大 STE 研）北海道—陸別第二 HF レーダーの現況について
5. 齊藤昭則（京大・理） ISS-IMAP の現状
6. 佐藤光輝（北大・理） ISS からのスプライト観測（JEM-GLIMS）初期観測結果報告
7. 柿並義宏（高知工科大）クワジラン環礁で行われたリチウム放出実験の速報と今後の予定
8. 阿部琢美（JAXA）将来の観測ロケット実験計画検討に関する打ち合わせ会開催のご案内
9. 津川卓也（NICT）国内外高密度 GPS-TEC 観測に関する現状報告
10. MTI 世話人 MTI 次期世話人について

本会合にて第 6 期世話人の任期が満了となることから、次期第 7 期世話人の選出に関する提案が行われ、参加者の同意が得られた。本会合に参加しなかった方々に配慮し、前例に倣ってメーリングリストにて提案内容が示され、特に異論がなかったことから提案どおり現在の第 7 期世話人が決定された。

また、同日夕刻に懇親会を開催し、58 名の参加があった。

第 25 回 MTI 研究会集会

日時：平成 25 年 11 月 5 日（火） 12:50-13:50

場所：高知大学総合研究棟 2 階会議室 1（A 会場）

話題提供：

1. 塩川和夫（名大 STE 研）次期 SCOSTEP プログラム VarSITI (2014-2018) について
 2. 田中良昌（極地研）IUGONET プロジェクト活動報告
 3. 津川卓也、石井守（NICT）WDS データへの DOI 付与について
 4. 斎藤享（電子航法研究所） ICAO アジア太平洋地域の電離圏関連活動について
 5. 齊藤昭則（京都大・理学研究科）ISS-IMAP の現状
 6. 西谷望（名大 STE 研）SuperDARN 北海道—陸別第二 HF レーダーの進展状況
 7. MTI 世話人 南極資料 MTI 特集号、MTI 研究会講演資料公開について
- SGEPS 秋学会開催期間中の 11 月 3 日夕刻に懇親会を開催し、44 名の参加があった。

中間圏・熱圏・電離圏 (MTI) 研究集会

開催日：平成 25 年 9 月 17 日（火）-18 日（水）

場所：情報通信研究機構 小金井本部 本館 4 階国際会議室

MTI 研究集会は、平成 10 年以降毎年開催されてきた。本年は、名古屋大学太陽地球環境研究所、国立極地研究所、情報通信研究機構の共催で 2 日間開催した。当日は台風が関東地方に接近する中、70 名が参加し、26 件の講演（口頭発表 18 件、ポスター発表 8 件）があった。本集会では平成 22 年度から引き続き、MTI 領域を研究する若手の口頭発表及び質疑応答の時間を長めに割くプログラムとし、若手自身が座長を務めることにより、活発な議論ができる場を設けた。また今

回のMTI研究会では「MTI分野の飛行体観測の将来計画」をテーマとして、国内外のロケット実験や衛星観測の専門家に最新の研究成果を紹介していただいた。共同開催されたISS-IMAP研究集会における大気光観測装置(IMAP)の最新成果やデータ利用方法などと合わせ、将来計画について活発な議論が行われた。

南極資料「中間圏・熱圏・電離圏研究の最前線」出版

本年度は、国立極地研究所発行の南極資料「中間圏・熱圏・電離圏研究の最前線」の編集作業を進めた。これは平成24年度MTI研究集会での若手研究者による講演内容を中心にまとめた論文集(査読付き、英文あるいは和文)である。平成26年3月に南極資料(Vol.57, No.3)として電子版が公開された。南極資料はオープンアクセスであり、下記ウェブサイトで閲覧することができる。

<http://polaris.nipr.ac.jp/~library/publication/ARj.html>

MTI研究会の活動・関連情報(研究集会など)やメーリングリストへの参加方法は、MTI研究会ウェブサイト(<http://www2.nict.go.jp/aeri/swe/MTI>)にて公開している。

太陽地球惑星系科学 シミュレーション分科会 三好隆博、梅田隆行

当分科会は、SGEPSSおよび周辺研究諸分野の研究者と「数値シミュレーション」を共通のキーワードとして交流を図る事を活動目的としています。平成25年12月に以下の研究会を開催しました。

○太陽地球惑星系科学(STP)シミュレーション
関連合同研究会

日程：2013年12月24日ー12月27日
場所：九州大学情報基盤研究開発センター(箱崎キャンパス)

当分科会共催のもと、「STEシミュレーション研究会(平成25年度名古屋大学太陽地球環境研究所研究集会)」「(世話人：梅田隆行)」「太陽地球惑星系科学(STP)シミュレーション・モデリング技法勉強会(第241回生存圏シンポジウム)」「(世話人：寺田直樹、大村善治)」「九州大学 先駆的科学的計算に関するフォーラム」(世話人：深沢圭一郎)、「千葉大学ハドロン宇宙国際研究センター 宇宙磁気流体・プラズマシミュレーションワークショップ」(世話人：松本洋介、松元亮治)のSTPシミュレーションに関連する4つの研究会を合同で開催しました。クリスマスをはさむ4日間で28件の講演および延べ120名の参加がありました。

本合同研究会では、太陽地球系科学・プラズマ科学に関するシミュレーション全般、領域間/スケール間結合モデル、宇宙天気シミュレーションなどの最新の研究成果・展望を議論し、今後のSTPシミュレーション研究および計算機共同利用研究の方向性を見出すことを目的としています。また、今回は特に、天体物理分野との合同研究会とすることによって、磁気流体的プラズマ現象の多様性やプラズマ物理としての共通性について議論を深めました。

天体物理に関する招待講演として、相対論的抵抗性輻射磁気流体コード(高橋博之)、ジャイロ運動論コードAstroGK(龍野智哉)など最新の天体シミュレーションコードの紹介がありました。降着円盤(町田真美)や原始惑星円盤(町田正博)などの天体磁気流体シミュレーションについても話題提供が行われました。さらに最先端の磁気流体シミュレーション技法として、高次精度化手法のレビュー(三好隆博)と実践(寰島敬)について招待講演があり、これに関連する最新の流体コードについての講演が続きました。これら以外にも、GPUやXeon Phiなどの最新のアクセラレータの利用方法に関する講習会もあり、参加者にとって有益な情報が多々ありました。一般講演として、衝撃波、乱流、磁気リコネクション、磁気圏ダイナミクス、プラズマ波動、太陽風モデリング、太陽ダイナモなどの様々な天体、太陽地球系科学およびプラズマ科学に関するシミュレーション研究の最新成果が報告されました。本合同研究会のプログラムは、<http://center.stelab.nagoya-u.ac.jp/simulation/meeting2013/>に掲載されています。

その他の分科会活動および関連情報は、
[http://center.stelab.nagoya-u.ac.jp/
simulation/](http://center.stelab.nagoya-u.ac.jp/simulation/) をご覧ください。

第 22 回 衛星設計コンテスト 参加登録開始のお知らせ

SGEPSS も主催団体となっている、衛星設計コ
ンテストの今年度の参加登録が始まりました。

参加登録期間は、4月1日(火)～5月30日(金)
となっております。興味のある方は、下記
ウェブサイトより詳細をご確認ください。

<http://www.satcon.jp/>

(実行委員 中村正人、坂野井和代、企画委員：
中田裕之)

空 白 ペ ー ジ

学会賞・国際交流事業関係年間スケジュール

積極的な応募・推薦をお願いします。詳細は学会ホームページを参照願います。

賞・事業名	応募・推薦／問い合わせ先	締め切り
長谷川・永田賞	会長	2月28日
田中館賞	会長	8月31日
学会特別表彰	会長	2月28日
大林奨励賞	大林奨励賞候補者推薦委員長	1月31日
学生発表賞	推薦なし／問合せは運営委員会	
国際学術交流若手派遣	運営委員会	5月11日、7月20日、10月10日、1月23日
国際学術交流外国人招聘	運営委員会	若手派遣と同じ
SGEPSS フロンティア賞	SGEPSS フロンティア賞候補者推薦委員長	2月28日
国際学術研究集会	運営委員会	7月20日

SGEPSS Calendar

- '14-4-28 ~ 5-2 日本地球惑星科学連合 2014 年大会 (横浜)
- '14-5-25 ~ 31 14th International Workshop on Technical and Scientific Aspects of MST Radar (Sao Jose dos Campos, Brazil)
- '14-7-28 ~ 8-1 AOGS 11th Annual Meet (札幌)
- '14-8-2 ~ 10 40th COSPAR Scientific Assembly (Moscow, Russia)
- '14-8-14 ~ 23 31th URSI General Assembly (Beijing, China)
- '14-8-31 ~ 9-5 AGU Chapman Conference on Low-Frequency Waves in Space Plasmas (Jeju Island, Korea)
- '14-11-10 ~ 14 第 12 回国際サブストーム会議 (志摩)

地球電磁気・地球惑星圏学会 (SGEPSS)

会長 中村正人 〒252-5210 神奈川県相模原市中央区由野台 3-1-1 宇宙航空研究開発機構
宇宙科学研究所

TEL: 050-3362-3936 FAX: 042-759-8205 E-mail: nakamura.masato@jaxa.jp

総務 篠原育 〒252-5210 神奈川県相模原市中央区由野台 3-1-1 宇宙航空研究開発機構
宇宙科学研究所 学際科学研究系

E-mail: iku@stp.isas.jaxa.jp

広報 吉川一朗 (会報担当) 〒113-0033 東京都文京区本郷 7-3-1 東京大学
大学院理学系研究科地球惑星科学専攻

TEL: 03-5841-4577 FAX: 03-5841-4577 E-mail: yoshikawa@eps.s.u-tokyo.ac.jp

吉川顕正 (会報担当) 〒812-8581 福岡県福岡市東区箱崎 6-10-1 九州大学
大学院理学研究院地球惑星科学部門

TEL: 092-642-2672 FAX: 092-642-4403 E-mail: yoshi@geo.kyushu-u.ac.jp

尾花由紀 (会報担当) 〒572-8530 大阪府寝屋川市初町 18-8 大阪電気通信大学
工学部基礎理工学科

TEL: 072-824-1131 E-mail: obana@isc.osakac.ac.jp

運営委員会 (事務局) 〒650-0033 神戸市中央区江戸町 85-1 ベイ・ウイング神戸ビル 10 階
(株) プロアクティブ内 地球電磁気・地球惑星圏学会事務局

TEL: 078-332-3703 FAX: 078-332-2506 E-mail: sgepss@pac.ne.jp

賛助会員リスト

下記の企業は、本学会の賛助会員として、
地球電磁気学および地球惑星圏科学の発展に貢献されています。

(有) テラテクニカ (2口)
〒208-0022
東京都武蔵村山市榎3丁目25番
地1
tel. 042-516-9762
fax. 042-516-9763
URL <http://www.tierra.co.jp/>

Exelis VIS 株式会社
東京オフィス
〒101-0064
東京都千代田区猿楽町2-7-17
織本ビル3F
tel. 03-6904-2475
fax. 03-5280-0800
URL <http://www.exelisvis.com/>

クローバテック (株)
〒180-0006
東京都武蔵野市中町3-27-26
tel. 0422-37-2477
fax. 0422-37-2478
URL <http://www.clovertech.co.jp/>

(有) テラパブ
〒158-0083
東京都世田谷区奥沢5-27-19-2003
tel. 03-3718-7500
fax. 03-3718-4406
URL <http://www.terrapub.co.jp/>

日鉄鉱コンサルタント (株)
〒108-0014
東京都港区芝4丁目2-3NOF 芝ビル5F
tel. 03-6414-2766
fax. 03-6414-2772
URL <http://www.nmconsults.co.jp/>

日本電気 (株) 宇宙システム事業部
〒183-8501
東京都府中市日新町1-10
tel. 042-333-3933
fax. 042-333-3949
URL <http://www.nec.co.jp/solution/space/>

富士通 (株)
〒261-8588
千葉県美浜区中瀬1-9-3
富士通 (株) 幕張システムラボラトリ
tel. 043-299-3246
fax. 043-299-3011
URL <http://jp.fujitsu.com/>

丸文 (株) システム営業本部
営業第一部計測機器課
〒103-8577
東京都中央区日本橋大伝馬町8-1
tel. 03-3639-9881
fax. 03-3661-7473
URL <http://www.marubun.co.jp/>

明星電気 (株) 技術開発本部
装置開発部
〒372-8585
群馬県伊勢崎市長沼町2223
tel. 0270-32-1113
fax. 0270-32-0988
URL <http://www.meisei.co.jp/>